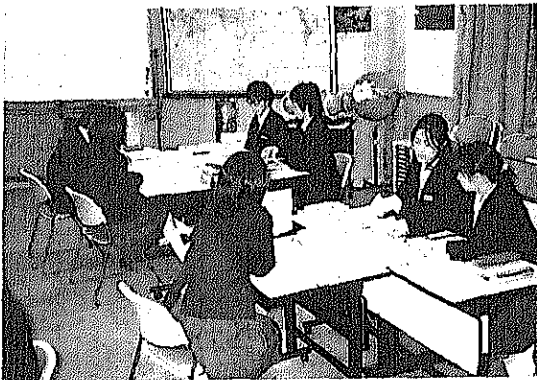
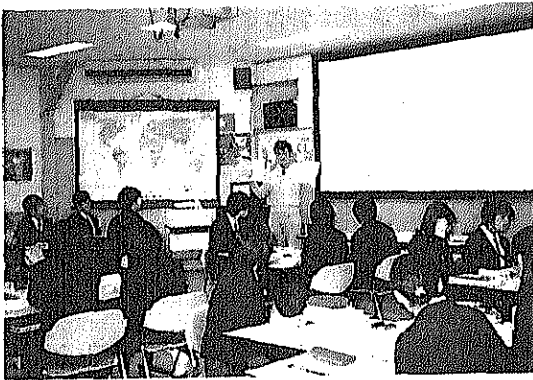


③各グループ内で討論する

グループ内で開発計画のプラス面とマイナス面について討論を行い、自分が所属しているグループの立場を鮮明にした。それを基に、「投資家」と「環境保護団体」のグループは、「村のグループ」が納得してくれる案を作成した。

④経済開発を行う際に留意する点について考え、以下の文中の()にあてはまる語句を発表した。

経済開発を行う際には()について留意する必要がある。



<ワークシート>

1. 「村のグループ」の話し合う内容

- ①各グループの条件を参考にしながら自分たちの村の将来(方向性)について考える

【検討事項】

- (イ) 「開発」と「保護」どちらを選択するか。
(ロ) その理由はなぜか。

2. 「投資家のグループ」の話し合う内容

- ①各グループの条件から、開発のあり方を検討する

【検討事項】

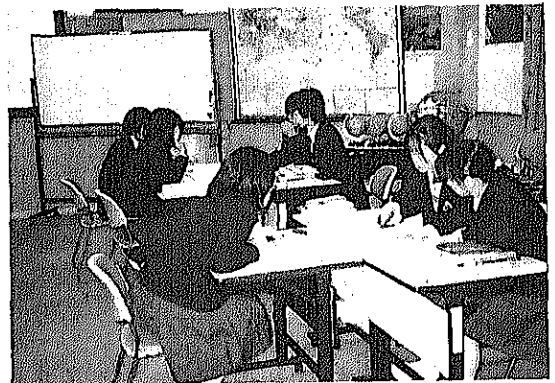
- (イ) なぜ、開発が必要なのか。
(ロ) 各グループから問題点を解決するためにはどのような開発を行うべきか。

3. 「環境保護団体のグループ」の話し合う内容

- ①開発の波に対して、どのように保護していくかを検討する

【検討事項】

- (イ) なぜ、森林の保護が必要なのか。
(ロ) 保護するために、どのような取り組みを行うべきか。



▶4時間目 先進国のなすべきことについて考える

前回の授業での「経済開発を行う際に留意する点」のまとめのシートを使って、これからの経済開発のあり方について考えた。

特に「持続可能な開発」とはどのような開発であるかについて、各グループで考えまとめさせた。

授業の流れ

前回の授業のまとめのシートを使って、経済開発を行う際に留意する点について、意見を発表させた。

〈各グループの発表例〉

- ・先進国の技術をいきなり持ち込むのではなく、環境への影響を考えながら適正な技術の導入が必要である
- ・伝統的な生活様式や文化を尊重しながら、少しずつ開発を進めていく必要がある。

そして、各国の開発途上国に対する援助の取り組みについてまとめた。

日本の例として、JICA（国際協力事業団）の取り組みについて、研修での写真を使って紹介した。

3 おわりに

国際化の時代、国際理解が必要な時代だからこそ地理学習の充実が必要との意見がよく聞かれる。今回の研修を通して、国際化の進展する日本や、国際社会における日本の役割などを考える機会を与えられ、日本人が開発の進んだ一部の地域だけではなく、世界の隅々までいって活動し、世界に貢献している姿を直接目にする事ができた。その中から、高校教師として、生徒たちとともに何を考え、また実践していかなければならないかを学んだように思われる。さらに、地理学習の有用性や今後の地理学習の方向性を自ら確認することもできた。

今回の研修で得たものは数多く、また、このような研修の機会を与えられたことに心から感謝申し上げます。

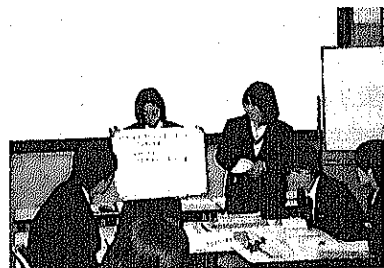
▶生徒の感想から（抜粋）

授業を通しての成果

- ・地域開発の際に留意しなければならないことが、他のグループの発表から気づいた。
- ・普段あまり意識していなかったが、相手の立場になって物事を考えることができて良かった。
- ・ひとつの開発がどのように周囲に影響を与えていくかをみんなで考えることができ楽しかった。
- ・自分では考えなかったことを他の人の意見から聞くことができ勉強になった。
- ・普段の授業などで勉強したことを活かして、友人と討論することができ良かった。
- ・問題について話し合うことには、大変時間がかかるので嫌いであった。しかし今回は、いろんな立場の人の考えを聞いてとても参考になったし、これからの国際社会では「話し合う」ということが、何よりも大切だということがよくわかった。

これからの課題

- ・地域文化を守っていくことと地域開発とのそれぞれの重要性がわかった。その中で、今後どのようにして両者の調和を探っていくべきかわからない。
- ・様々なことがらについて、みんなと話し合うことができ良かったが、同時に自分の知識のなさも痛感した。もっと勉強しなければならない。
- ・開発途上国に対して、無理して地域開発をしていく必要はないのではないか。
- ・先進国が行っている国際協力や国際援助について、どのように行われているか、改善された点や問題点についてももう一度調べてみたい。特に日本の行ったものに対して。



農業科目における開発教育の実践

～ボリビア・沖縄移住地～

NOBORU HAMASATO

濱里 登

農業
沖縄県立南部農林高等学校

1 はじめに

本校は、昨年創立50周年の記念行事を終えた伝統ある農林高校である。本校の歴史において、かつて拓殖科が設置され、移住者を養成する目的で教育が行われていた時代があった。沖縄県はこれまで多くの海外移住者を送り出してきた県であり、県のイベントとして「世界のウチナーンチュ大会」も開催され、外国で成功した県出身者の方々を沖縄に招いて、地元との交流行事も開催されている。

今回訪問したボリビアも沖縄からの移住者を積極的に受け入れてもらった国である。よって、私の開発教育の実践活動は単なる発展途上国としてのボリビアの紹介ではなく、沖縄から移住をしていった人達の国として、むしろ恩のある国として理解させることが重要であると考えて授業実践を試みた。

ボリビアにあるコロニア・オキナワは農業を営んでいるので沖縄の農業とどのような違いがあるのかについても説明を行い、魅力ある農業経営を実践している地域として紹介を行うことにした。

2 実践の概要

(1) 対象生徒

施設園芸科 1年生41名 2年生24名 3年生8名

(2) 実施科目

農業基礎(1年) 3時間 草花(2年) 2時間

草花(3年) 2時間

3 実践

(1) 農業基礎(1年生)での実践

▶1時間目

ボリビアの概要について、地理的な位置、国土の広さ、人口、民族、主な産業等を紹介し、国際協力事業団が、専門家や青年海外協力隊員等を派遣し、様々な技術協力と資金援助を行っていることを説明した後、ボリビア視察ビデオを鑑賞(視察した場所をビデオで収録しておいたので活用)させた。

ビデオの内容

ラバスの風景 → 図書館訪問 →
 ラバス陸上競技場 →
 プエルト・デ・メヒヨネス職業訓練校視察 →
 メルカードユンガス保育園 → 水産センター →
 ベネズエラ高校視察 → 小学校の様子 →
 サンタクルスの風景 → コロニア・オキナワ →
 オキナワ日ボ学校 → 農業試験場

▶2時間目

①CDを聞く

2時間目の授業の導入は、変化を持たせる意味で音楽鑑賞から行うことにした。ボリビアで買ってき

たCDを聞かせ、このような音楽は今までに聞いたことがありますかと質問をする。生徒の反応は、聞いたことがないという生徒がほとんどであった。そこで、この音楽がフォルクローレと言われているものであることを説明した。フォルクローレの説明文は板書きし、楽器の紹介も行う。

②ケーナの演奏

楽器を見せるだけではどのような音がでるのかわからないので、耳で聞くことも大切であると思い、ケーナの音出しを練習して聞かせることにした。沖縄の民謡の1フレーズを吹いて聞かせると、生徒の反応はおしゃべりがなくなり全員の目が1点に注がれて興味深そうに眺めていたので、CDを聞かせた時よりも反応は良い感触をうけた。一瞬だけ緊張感のある空間になった。

このように、CDを聞かせたり、楽器を演奏して聞かせることで南米の音楽にも興味を示してもらい、より身近に感じられればよいと思った。

③ポリビアクイズに挑戦しよう（資料1参照）

ポリビアについての知識をより定着させる方法として、クイズを作成して回答をしてもらった。生徒が回答を終えた頃に、問題に従って解答を行い、詳しく説明をした。

④海外移住アンケート（資料2参照）

沖縄県は移住県と言われているが、本校の生徒達が、沖縄県の移住についてどれだけの情報を得ているのか、あるいは、どのような考えを持っているのかを把握するために海外移住についてのアンケートを実施した。これは、次の時間のポリビアの移住地についての話の導入にも活用することを狙いとした。

▶ 3時間目

①沖縄県からの移住を知ろう

2時間目のアンケートを受けて、沖縄県から海外移住が行われた国と人数について説明し、100年前

から移住が行われていたことを資料を提供(資料3参照)し、その当時、なぜ移住をしなければならなかったのか?と問いかけて当時の状況が今とは比較にならないくらい貧しかったことを理解させるようにした。

②コロニア・オキナワをもっと知ろう

次に、ビデオで見たコロニア・オキナワ移住地を覚えていますか?と質問をしてコロニア・オキナワを思い出させる。そこで、なぜ、遠くのポリビアで多くの沖縄の人達を受け入れるようになったのかについて、コロニア・オキナワ入植40周年の本を提示して、説明を行った。移住の背景を話したあと、戦後の移住でもコロニア・オキナワが大きく発展していることを表1の資料を示して説明を行った。

表1 移住地比較

	サンファン	コロニア・オキナワ	沖縄県
耕地面積(㊦)	27,132	46,890	43,700(H9)
農家戸数(戸)	244	221	29,990(H10)
農業人口(人)	791	818	81,760(H10)
年平均気温	24.1℃	24℃	24.4℃(H10)
年間降水量	1,907mm	1,322mm	3,322mm(H10)

表1の移住地比較より、コロニア・オキナワの面積と沖縄県全体の耕地面積とを比較し、コロニア・オキナワのほうが広く、しかも少ない人数で広大な面積を所有しての農業経営であることを理解させ、コロニア・オキナワの広さをイメージさせた。

③コロニア・オキナワ移住地での主力作物の変遷

移住地での主力作物の説明は、移住地の農業を知る上でとても重要であるので取り上げて説明をした。以下に、説明した内容を示した。

▶移住当初から1960年代は陸稲が主流であった。「アロス・オキナワ(沖縄の米)」の名がサンタクルス県内だけでなく、県外にも出荷され、ジャガイモを主食とする高地の住民も米を食べるようになり、需要は伸びていったそうである。ところが、60年代

半ばまで順調に降っていた雨が、年間1,000mm足らずとなり干ばつとなった。そして、68年2月には大洪水の被害に遭い収穫も出来ない状況であった。この大洪水を機に、ブラジル、ペルー、アルゼンチンなどへ転住する人が続出し、沖縄へ帰った人も出たそうである。

▶1970年代には、海外移住事業団が新たな基幹作物として綿花を選定した。綿花栽培は移住事業団の徹底した指導により破竹の勢いで生産量を伸ばし、1971年7月には事業団の融資により繰綿工場も完成し、1973年ごろにピークに達し米作以上の収益を移住者にもたらしたそうである。しかし、78年頃から雨量が増えつづけ収穫量が減り、取引価格も下落し、綿花栽培はコロニア・オキナワのみならずサンタクルス県全体が深刻な経営不振に陥り、新たな作物への転換が迫られたそうである。

▶1980年代に入ると大豆作を基幹作物とし、1987年6月にはコロニア・オキナワ農牧総合共同組合が搾油、飼料工場を完成させてから當農が安定的に発展してきたそうである。

(2) 草花(2年生)での実践 2時間

▶授業全体の流れ

はじめに、1年生にも使用したのと同じボリビアクイズと海外移住アンケートに答えてもらい、全員が記入したのを確認してから、ボリビアを視察したときに私が撮影したビデオを見せることにした。1年生の授業では、ビデオを見せるだけで終わってしまったので、2年生では、ビデオを途中で止めて、各場面ごとに受け取った印象を感想として書かせるようにした。ビデオ鑑賞を終了した後は、南北問題についてグループディスカッションを行い、2時間の開発教育の実践を終了した。

①ボリビアクイズと海外移住アンケート(資料1、2参照)

クイズ形式で答えてもらうことで、生徒個人個人がボリビアに対する知識をどの程度知っているかをはじめに掌握しようとの狙いでクイズを行った。ク

イズの結果より、ボリビアは海のない国であるかとの問いに、11人の生徒が「いいえ」の回答をし、生徒達にとってボリビアの国は、身近な国としての存在ではなく、知識量も豊富でなく、関心も薄いというのが集計結果より浮かびあがってきた。

②ビデオ鑑賞の感想

ラパス陸上競技場 → 水産センター →
ベネズエラ高校視察 → オキナワ日本語学校 →
コロニア・オキナワ →

●ラパス陸上競技場での活動現場

- ・高い山などがある所で走ったりしてすごいと思った。普通なら息がつかなくなるのに。
- ・普通のトレーニングを標高3,000m以上の高さで行っていたので、この人達は強靱な体力をもっていると思った。
- ・自分もそこで走ってすぐに疲れるのかなと思った。
- ・標高3,000m以上で走っている選手は低地ではどのくらい走れるのかなと思いました。

●水産センター

- ・魚が一杯いた。とてもニジマスがきれいだった。大きな魚を育てていた。
- ・水がきれい。水の色が透き通っている。ニジマスが多く、色が輝いている。
- ・ニジマスの養殖を成功させたので日本の技術援助はすごいと思った。
- ・すごい技術を持っているのですごいなと思った。
- ・ニジマスの養殖ができるようになったら肉中心の生活が変わっていくと思う。

●ベネズエラ高校

- ・ボリビアのダンスはいっぱいある。学校もふるい。暗い。狭そう。
- ・すごく楽しそう。とても頭良さそうでした。とても真面目そうだった。
- ・伝統的な踊りはちょっと激しい。踊りが面白かった。踊りがうまかった。衣装もすごかった。
- ・1～3年まで白衣で、4年生でやっと制服を着れ

るので、ここで制服を着れるのは、相当努力しないと大変だというのが何となく分かった。

- ・日本の学校に比べ非常に厳しい。
- オキナワ日ボ学校
 - ・校舎がラパスの学校より大きくきれいだ。外もきれいで広い。
 - ・沖縄とほぼ同じ顔をしていた。
 - ・自分達みたいな人々がいる。グラウンドが緑。
 - ・一生懸命な感じが伝わってきた。
 - ・面積がとても広く、子供達が元気よく走っていた。
 - ・午前と午後によって、学校が違うからすごいと思った。
 - ・運動場が砂でなく、芝生になっていたという違いがあった。
- コロニア・オキナワ
 - ・畑がすごくきれい、みんな緑一杯で大きい、広い。畑がとても広がった。
 - ・周りが緑一杯で良い。
 - ・沖縄の人が住んでいるのがすごい。
 - ・日本の農業のやり方とは少し違う方法でやらなくてはいけないということが分かった。
- 全体的な感想
 - ・ボリビアは、自分が想像していたより案外きれいな所。家のづくりも簡単につくっていきそう(学校など)。
 - ・一度は行ってみたい所。
 - ・野原というのか、畑の風景が多かった。道がまっすぐであった。まだまだ発展しがいのある国だと思った。
 - ・この国の人々は、なんとなくとてもフレンドリーな気持ちがして仲良くなれたら楽しい旅ができそうです。
 - ・ボリビアのことが分かるようになった。
 - ・ボリビアはすごいと思った。
 - ・一直線の道があり、学校では教室が明るくなく薄暗い中勉強しているのですごいと思った。
 - ・日本人が海外に移住することによって、少しずつ栄えてきているように感じる。
 - ・設備があまり充実していなかった。

③ビデオ鑑賞の感想をまとめて思うこと

高山都市ラパスでは、空気が低地より少なく、着いたばかりの人は頭痛に悩まされ、歩くのもやっとなのであるとの私自身の体験をまじえながら話を進めていったので、私の体験とビデオの映像から生徒が様々な受け止め方をしたようである。日ボ学校の場面では、ラパスの学校より大きくきれいだとか、沖縄とほぼ同じ顔をした人達がいた、等の感想があり、遠い国であるはずのボリビアを自分達と同じ顔だということでも親近感を持ち、心の距離がいきなり縮まったようである。また、午前と午後から学校が違うからすごいと思った等の感想もあり、遠い国でも沖縄の人達は教育を大切にして、人材育成に力を注いでいることを理解したようである。あわせて、ボリビアでは、1日4時間の授業しか受けられないので国の教育予算も少なく、日本がどれだけ恵まれた教育環境を有しているかを、生徒は理解したようである。

④南北問題の視点からボリビアを見つめよう

ボリビアのビデオを一通り見た後に、南北問題ということを知っていますかと生徒に質問をした。生徒は北と南の問題で、富める国と貧しい国との関係であると答えてくれた。そこで、質問を切り換えてボリビアは、豊かな国ですか、それとも貧しい国だと思いますか、と問いかけてみると、生徒からは豊かな国であるとの答えはなかった。ほとんどの生徒が貧しい国だとビデオを見て感じているようである。

南北問題についての進め方は、4グループに分かれて、南北問題をそのまま放置すればどのような問題がおきるのか？ 南北問題を解決するためにどのようなことを取り組めばよいのか？ との2つの討議の柱を設けてディスカッションをさせた。

<生徒の反応>

現状を放置すれば

- ・貿易ができなくなる。
- ・貧困に喘ぐ人が多くなる。
- ・餓死する人が多くなる。
- ・戦争がおきる

〈解決方法〉

- ・北の人は南の人へ技術指導員を派遣し技術を教える。
- ・南の方に目を向け、仕事を増やし、いろんな知識や技術を提供する。

以上が生徒の話し合いの中での結論であった。技術指導を数多く行うことが南北問題の解決につながるのと話し合いがなされたので、現在日本では、国際協力事業団がその業務を遂行していることをまとめとして話をした。

南北問題を取り扱うときに注意した点としては、豊かな国の人は幸せ、貧しい国の人々は不幸せとの概念を持たせないようにし、経済的な豊かさと人間が精神的に感じる幸せとは別の次元であり、国が貧しくても人々が明るく豊しく生きているボリビアの現状からむしろ多くのことを学ぶべきであるとアプローチをした。

4 おわりに

開発教育の実践は、JICA東京国際研修センターで研修を受けて参加型の学習が効果的であることは分かっている、いざ、自分で実践してみる段階になると思うようにうまくいかないのがよく分かり、まだまだ力不足であることを知らされた。ビデオを鑑賞させるにしても、1年生では、ただ見せるだけで終わってしまい、生徒がどのような反応を示したのかを把握できなかったが、その反応を生かして、2

年生では、工夫を凝らしてビデオを鑑賞させることができた。クイズやアンケート等を取り入れることでより具体的に生徒の反応を知ることができたのは収穫であった。

本校は農業高校なので、ボリビア視察の体験を農業との関連で授業実践はできないものかと考えて実践を試みた。また、沖縄からの海外移住が100年の歳月を刻み、沖縄系の人々の活躍をマスコミ等でもよく目にするようになり、海外移住を開発教育実践の中に取り入れながら国際社会に目を向けさせることも大切だと思い、海外移住を取り入れることができたのは良かったのではないだろうか。

授業後の生徒の反応をまとめてみると、多くの発見があった。ビデオの感想からは生徒の新鮮な感動の声を聞くことができた。アンケートでは、もし海外で働いた収入があれば家族のために送金を考えますか、との問いに関してほとんどの生徒が送金をすると答えてくれ、本校の生徒達も家族を大切にしたいとの気持ちが強いことを知り、生徒の素晴らしい一面を発見できたのはとても良かった。

コロニア・オキナワの移住地の農業と沖縄県の農業を比較することによって、日頃学習している農業学習を世界的な視野に立って見直してみるいい機会にもなったと思われます。

今後は、ゲーム形式を取り入れたり、ディスカッションを増やしたりして、もっと生徒を授業に参加させ工夫をしたいと考えています。

濱里教諭の授業実践に対する解説

この授業実践は、農林高校という学校の特徴と海外移住者が多いという沖縄県の地域特性を開発教育の授業に取り入れたユニーク（貴重）な実践事例である。初めての試みということであり、授業の内容や流れは改良の余地があるものの、単なる理解対象としての途上国（ボリビア）学習ではなく、沖縄の歴史的背景や農業の現状との比較などを組み込むことによって生徒達の身近な問題として考えさせる工夫がされている。

開発教育の大きな目標の一つが、私たち自身の生活のあり方を見直すことであることを考えるとき、この事例の応用・発展の可能性は大きい。海外移住の歴史は、実は決して沖縄だけの特徴ではない。かつて日本全体が経済的発展を遂げていなかった時代には、全国各地から世界に新開地を求めて多くの人々が海を渡った。また、戦前には中国や朝鮮半島などにも多くの日本人が進出した歴史もある。

生徒たちと共に地域の歴史的背景などを調べ、私たちと外国とのつながりを分析することは、日本人としての私たちの責任感を高めることにもつながる。そして、それは私たちが地球市民として地域の中で何ができるかを考える前提ともなる。海外の問題を理解するに留まることなく、地域とつなげる視点で授業実践をしていただきたい。

グローバル教育・西東京センター／桜井高志

資料1

ボリビアクイズの内容（2年生の集計結果）

	(ア：はい)	イ：いいえ)
1. ボリビアの首都はラパスである	ア：9人	イ：9人
2. ボリビアではニジマスの養殖が行われている	ア：8人	イ：10人
3. ボリビアへも日本からの援助が行われている	ア：10人	イ：4人
4. ボリビアの文盲率は50%あると言われている	ア：5人	イ：11人
5. ボリビアは海がない国である	ア：6人	イ：11人
6. ボリビアの人は肉より魚を多く食べる	ア：9人	イ：8人
7. ボリビアには世界一標高の高い所に湖がある	ア：9人	イ：8人
8. ボリビアにはオキナワという所がある	ア：5人	イ：12人
9. ボリビアの人の主食は米である	ア：9人	イ：9人
10. ボリビアの学校は1日6時間の授業をしている	ア：5人	イ：12人

資料2

海外移住アンケート（2年生の集計結果）

- 沖縄県は海外移住の多い県だと思うか
ア：思う 12人 イ：思わない 4人 ウ：どちらともいえない 2人
- 海外移住は何年前からだと思うか
ア：50年 10人 イ：100年 4人 ウ：150年 2人
- 親類に移住をした人はいますか
ア：いる 3人 イ：いない 14人
- 周囲に移住をした人はいますか
ア：いる 3人 イ：いない 14人
- 移住から帰ってきている人はいますか
ア：いる 4人 イ：いない 13人
- 沖縄から移住していった国を言えますか国名を書いて下さい
アメリカ・・・6人 ブラジル・・・3人 台湾・・・2人 中国・・・2人 ボリビア・・・2人
ペルー・・・1人 アルゼンチン・・・1人 イギリス・・・1人 カナダ・・・1人
タイ・・・1人 朝鮮・・・1人 韓国・・・1人
- あなたは移住の受け入れがあればしたいと思いますか
ア：したい 1人 イ：しない 6人 ウ：どちらともいえない 9人
- 農業移住があれば行きたいですか
ア：したい 3人 イ：しない 6人 ウ：どちらともいえない 6人
- 沖縄で働く場がないとしたら、海外移住を考えますか
ア：考える 7人 イ：貧困でも良いから残る 3人 ウ：その他 6人
- あなたがもし海外で働いた収入があれば家族のために送金を考えますか
ア：考える 14人 イ：自分が生活できればよい 0人 ウ：その他 2人
- あなたは、農業移住をすることになりました、何を準備して持って行きますか重要な物を書いて下さい
勉強と洋服・・・3人 筆記用具・・・2人 辞典・・・2人 種・・・1人
分からない・・・1人 文化と伝統・・・1人 食べ物・・・1人 地図・・・1人
飲み物・・・1人 寝袋・・・1人 お金・・・1人 知識・・・1人

資料 3

移民に関する資料は1977年沖縄県教育委員会発行の沖縄県史別巻『沖縄近代史辞典』より抜粋

①ハワイ移民

沖縄県からのハワイへの移民は、1899年(明治32年)12月10日横浜を出発、翌年1月8日ホノルルに着き、上陸が許可された26人が最初である。この初回移民は「沖縄県移民の父」当山久三の斡旋により契約移民として渡った。1940年(昭和15年)現在13,146人(男7,080人、女6,066人)を数え、1974年頃には、沖縄系移民は約4万人(全日系人の約15%)と推定され、広島、山口両県移民に次いで多い。ハワイ沖縄系移民の特徴は、初期より送金や持戻金が多く、県経済への貢献度が他国への移民に比べはるかに大きかった。そのことは成功した移民であったことを裏付けている。戦後の沖縄県の復興に際しても大きな支えとなった。

②ペルー移民

ペルーは沖縄県から南米初の移民を送り出した国。1906年(明治39年)36人が10月16日日本を出発、11月21日ペルーへ到着。1907年64人、1908年256人。いったん道が開かれると県からペルーへの移民は着実に増加していった。移民の特色は、当初甘シヤ耕地への契約移民として渡ったが、首都リマを中心とした都市へ進出し、飲食店や雑貨店などの商業を営んだり、理髪店を構える人が多かった。現在は、このような職種以外に医師や会計士などの自由業。綿花、野菜、花卉栽培、養鶏などの職業も数多く見られる。1974年(昭和49年)現在ペルーにおける沖縄系移民は38,000余人、日系人総数63,455人中の約60%をも占める。

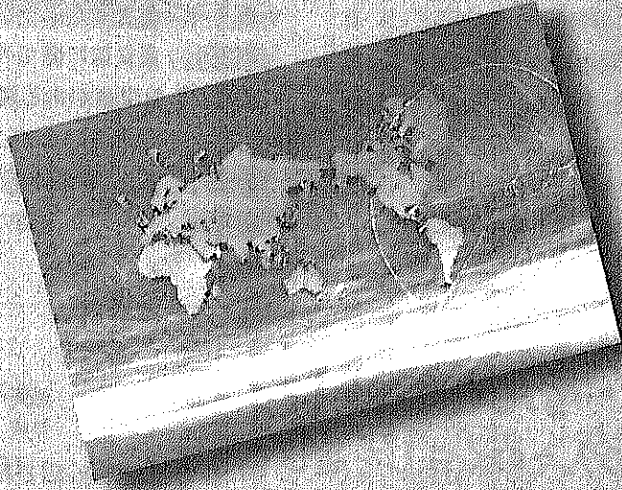
③ブラジル移民

沖縄県からブラジルへの移民は日本移民と軌を一にして、しかも初回日本移民の大部分を占めた。沖縄県初回移民は50家族325人で、初回日本移民全体の41.6%をも占めた。この移民はサンパウロ州コーヒー園への契約移民であり、以後の沖縄県移民の基礎を築いた。

1974年(昭和49年)現在、沖縄系移民は7万人余と日系人総数71万2189人の約10%にも相当し、熊本県移民について多くといわれる。

日系人のブラジルへの貢献度は農業を中心に、工業、商業等、政治、経済、社会、文化等あらゆる方面で顕著である。

授業実践アイデア集



ここでは、研修に参加して得た情報をもとに、ユニークで意欲的な授業を実践した事例をご紹介します。

Zambia

新しい授業の創造をめざして ～アフリカの大地、ザンビアを知る～

東京都立調布北高等学校
国語

小島 義晴

生徒に想像してもらおう授業の試み

生徒に向けてのメッセージ

あなたは近い将来、ザンビアにでかけることになりました。赴任期間は1年の予定です。JICAが実際に現地へ赴く駐在員のために、配っている資料を利用し、感じたことをなんでもいいから、箇条書きに書いてください。

①生徒に以下の詳細を印刷して全て配布する。その際、いくつかの視点を与えるため、あらかじめ、項目に分けてまとめ、読みやすいようにする。

項目概要 ア. 気候 イ. 地図上の位置 ウ. 食事 エ. 食糧の入手 オ. 持っていった方がいいもの カ. 予防接種 キ. 現地での医療事情 ク. 風土病、伝染病 ケ. 保健・衛生 コ. 教育事情(現地の学校) サ. 治安 シ. 防犯対策

②生徒の書き上げたものをまとめ、何が一番大切な注意事項かを確認する。大半の生徒は概況を読み、

かなり驚くのではないか。特に医療事情などにおいて安心してかかれる歯科医が数件しかなく、エイズの心配をたえずしなくてはならないこと。盲腸のような比較的容易な手術でも、南アフリカまで搬送されること。また治安が大変悪く、使用人にさえ、細かいことを話してはいけないことや、通勤経路を必ずかえること、警備員をかならずおくことなど、あまりにも私たちの日常とかけはなれているので、不安を抱くかもしれない。

③生徒をいくつかの班に分け、気づいた問題点を発表する。そのことに対して最良の方法は何かということ話し合う。

例1 歯医者さんがほとんどないという点について
回答例 赴任前に全ての歯についてチェックをしておす。もし虫歯がある場合は早急になおす。なるべく甘いものを食べない。

例2 風土病に対する不安について
回答例 住血吸虫予防のため決して川などには入

Bangladesh

自分の意見・考えを発表しよう

～開発途上国の人々のくらしを通して～

滋賀大学教育学部附属養護学校高等部
社会

中島 恭子

水からみえてくるもの

①バケツにある2種類の水から飲み水について考える。

- ・バケツにはいっているきれいな水を飲めますか？
- ・バケツにはいっている泥水を飲めますか？

日常、当然のように飲むことができる水(水道水)について、バケツという入れ物を使用した時にどう考えるか、また、どうしても水が飲めない時(緊急時)を想定して上記の質問を設定した。きれいな水

については、どうするか考えていた生徒もいたが、バケツ自体が多少きれいだったこともあり「きれいだから飲める」と考えた生徒がほとんどであった。しかし、「バケツの水だから飲めない」と主張した生徒もいた。また、CMの影響か「天然水にしたら飲める」と折衷案のような意見もあった。泥水については全員「飲めない」と言い切る。その理由は「きたないから」というものであった。

開発途上国の水についての現状を説明するととも

らない。またマラリアを媒介する蚊などについては十分注意し、必要ならば日本製の蚊取り線香、蚊帳なども持参する。

例3 防犯対策について

回答例 現地に着いたら、先に赴任している日本人とよく連絡をとり、安全な家のガードシステムについて、よく教えてもらう。必要なものは全てそろえる。夜の外出などは絶対にしない。またオープンマーケットに入る時など、貴重品は絶対に持たない。

例4 エイズ予防について

回答例 医者に行くときは、十分に衛生管理されているところだけにする。その他、現地女性、男性との交際には十分に注意する。

想像できるかぎりのあらゆる場合をイメージして、生徒に話し合わせる。その際、他の情報が必要となる。一番効果的なのは、やはりインターネットではないだろうか。ザンビアに関する気象や、地理的条件などはすぐに検索できる。さらには通貨のレート、経済の伸び率など、GNPに関するデータはすぐに集めることができるだろう。一番難しいのはやはり、現地の現在の様子である。生の声をどうやったら集

められるのか、生徒に考えさせてほしい。その際大使館などを通じて、日本にきている現地の人を紹介してもらうことなども視野に入れるとよいだろう。

ここまで事前の学習をした段階で、現地の新聞を読み、どのようなことが今ザンビアで現実に起こっているのかを知る。そのために「タイムス・オブ・ザンビア」の一部あるいは全部を増刷りし、生徒に読ませる。この中に現在のザンビアが持っている側面が全て出てくるであろう。場合によっては、インターネットによる記事の検索も可能である。

- ア. 新聞の記事を読ませ、興味、関心のある記事について翻訳させる。
- イ. 広告や、写真などで興味のあるものを自由に読ませる。
- ウ. スポーツ記事などを読んで、どのようなスポーツが盛んなのかを調べさせる。自由に意見を言わせ、なにがどのような理由で面白かったのかを語らせる。
- エ. ここまでは生徒の自由にさせ、その次に教師が、コラムを指定する。特に毎日の社説を読ませる。次に犯罪記事を読ませる。この二つをすることで、今日のザンビアの現状が、かなり明確になってくるであろう。

に、汚れた水を飲むことがどのようなことを引き起こすかについて考えさせた時、どの生徒も病気(下痢等)になることを発言した。

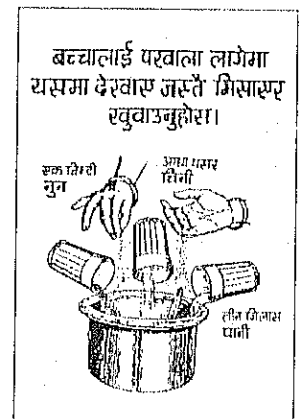
②コップにある2種類の水を飲み比べ、その違いを感じ、発表する。

2種の水…ORS(経口補水塩)、スポーツドリンク

先の病気(下痢)への対処法として、どの生徒も薬を飲む、病院へ行くというのをあげたが、この2種類の水も有効であることを告げ、飲み比べをさせてみた。ORSの方は飲んだとたん表情が変わった生徒がほとんどであり「カプセルみたいな味」「まずい、のめない」「薬がはいっている」と表現していた。一方、スポーツドリンクの方は飲み慣れていることもあり、すぐわかった様子であった。

③ORSのポスターを見てわかること・気付いたことを発表する。

日本語で書かれていないポスター(下図参照)を見せ、感想をきくと、すぐに「わからない。読めない。」という反応が返ってきた。ポスターの絵から少しは推測していた生徒もいたようだが、やはり難しい様子であった。ORSの作り方を日本語の表記に直すと納得した様子であった。



学ぶ意欲の糸口を探す

～南米ボリビアの体験を通じて～

野田学園中学高等学校（山口県）
国語

煙草 里恵

研修参加前の取り組み

A. 生徒自らの手によるビデオの制作

タイトル「今のわたしたち」

内容 学校での一日の流れ(朝の始業時間から授業中、および昼食時間、清掃の時間、放課後の部活動の様子などを収録、5分程度に編集)を、広報委員が中心になって取材。

教材設定の理由 普段の生活の中では、異文化どころか自分たちの属している社会にさえもそれほど関心を示すことがない生徒たち。まず、生徒自身で体を動かし、生の教材を制作させることによって、生徒の好奇心を掘り起こしたいと思った。実際、生徒たちはインタビュー等、興味深く取り組んでいた。そういった活動が、現在の自分たちの生活についての再認識につながると考えたからである。また、ビデオであれば言語に頼ることなく、事象を視覚、聴覚に訴えて提示できるという利点がある。制作したビデオはボリビアのベネズエラ高校での意見交換会で上映し、役立てることが出来た。

B. 絵葉書の制作

テーマ ステレオタイプの日本ではなく「わたしの伝えたい日本」、あるいは「現在、自分が関心のあること」を、身近な材料を利用してはがきに描くことを提示。

内容 この絵葉書は、生徒の関心を探る上で参考になり、大変興味深かった。我がクラスは全員芸術選択が美術であるせいも、個性的な作品が多かった。例えば、案山子や農村風景を描いた生徒もいれば、今流行の厚底靴の写真を切り抜きデザインしたものとか、切り絵と千代紙で日本を象徴的に表現したものとか多種多様。生徒達は関心を持っていないと思

い込んでいたが、40枚も集まった。現地との交流のきっかけとなればと思い、ベネズエラ高校の生徒や、お世話になった現地の方に手渡す。(但し、郵送料7ボリビアーノがあまりに高価なのに驚き、現地スタッフの方とも相談し、切手を貼り、住所を書いた上で渡した。生徒にボリビアの経済状況を考えさせる上でひとつのきっかけとなった。)

C. 生活意識調査

▶ 今どんなことに興味を持っているのか。

▶ 今一番大切なものは何か。

クラスの生徒の意識について、上記2点を調査。集計したデータを資料として現地の子供たちに提示し、意見交換会の時に役立てた。また、同じ質問にボリビアの子供たちがどう答えたのかも調査。集計対象の年齢、人数が異なるので比較は難しいが、参考資料として、授業の時に役立てた。

研修参加後の実践として

A. 絵葉書の到着

夏休みが明けたころから絵葉書が届き始めた。自分の書いた絵葉書がボリビアの風を携えて日本に返ってきたことを生徒たちはとても喜んでいて、やはり、直接体験による感動は大きい。この感動がボリビアという国に対する興味、学ぶ意欲につながったようだ。

B. 森重隊員に情報を送ろう。

聴覚障害児施設で言語療法士として活動している青年海外協力隊の森重隊員に、日本の聴覚障害者についての情報を知らせる活動を行おうと授業の中で提案。情報やアイデアといった精神的な面を支える

活動の重要性を説明。

その後、山口県立ろう学校の文化祭が行われることを知った私は、生徒とともに取材に出かけた。
(写真1参照)



写真1 山口県立ろう学校の文化祭にて(一番左が理卓教諭)

社会教育の場で

山口市民手話友の会での活動

現在、私は、山口県手話奉仕員として、活動している。このボリビアでの体験を地域の聴覚障害をもつ方たちにも知ってもらいたいという希望があった私は、手話友の会の事業部の方たちとも相談し、体験発表をさせていただくことになった。(写真2)

また、聴覚障害者の石永礼子さんの協力を得て、世界の手話、ジェスチャーノ(国際手話)の講義を合わせて開催していただいた。また、石永さんには、日本で使われなくなった補聴器をボリビアに送る活動(森重さんより依頼)にも協力していただいた。

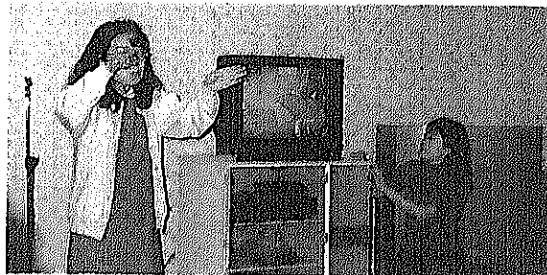


写真2 山口市民手話友の会での体験発表にて

Bolivia

生徒たちによる国際事情研究プロジェクト

九州学院高等学校(熊本県)
英語

阿部 英樹

ボリビアでの2週間の貴重な体験を一個人の経験として終わらせるのではなく、クラスの生徒たちとの共有財産となることを願って、およそ15時間を用いて実践を行った。

1-2時間目

JICAの紹介ビデオを上映
JICA関係の本・雑誌の紹介
ボリビアでの体験談

JICAの就職希望者用のビデオを上映したが、将来得意の英語を生かして海外で働くことを希望している生徒が多いので、ビデオに関する関心はとても高かった。

JICAの働きを紹介する本・雑誌が自分たちの予想していた以上に多くあることにも驚いていた様子だった。

ボリビアでの体験談には、熱心に耳を傾けて聞いてくれた。

3-4時間目

プロジェクトリーダー(12人)と具体的な進め方についての検討(市の国際交流会館で実施)

この企画を進めるための班長を募り、その人たち(プロジェクトリーダー)を中心に企画を進めることにした。国際交流会館にはODA白書やJICAの活動を知る上での参考図書や雑誌が多数あるために、企画を練る上ではとても便利であった。

話し合いの中で、具体的方法として、「ODA白書」にそった形でまとめるのが一番適当であるという結論を出した。そして、白書の分類に従って地域割りをして作業を進めることにした。

リーダー志願者の数である12グループに分けることになるが、リーダーが、リーダーシップを取って実行しやすくなるように具体的な資料収集方法に関して意見交換した。

そして、次のように班編成とテーマを決める。

1. JICAの位置づけ(全体の中での位置づけ)
2. JICAの組織、具体的な事業内容、プロジェクト
3. 東アジア
4. 南西アジア
5. 中近東地域
6. アフリカ地域
7. 中米およびカリブ地域
8. 南米地域
9. 大洋州地域
10. ヨーロッパ地域
11. 中央アジアおよびコーカサス地域
12. 日本と海外との相互依存関係

5-7時間目

学校図書館、県立図書館、市立図書館及び国際交流会館で情報及び資料収集

自分たちのテーマに合った本を探すのは、さほど困難なことではないと予想していたが、学校から出て戻ってくるまでの時間は約3時間を要した。

図書館で一人が2~5冊を借りてきたことで、各

班は担当国の政治・経済・文化など、さまざまな種類の情報を入手できた。こうして、プロジェクトを進めている実感を持ち始めるが、資料・本のテーマを絞っていく作業に移るまでには時間がかかることになった。

8-12時間目

各班、発表用の資料を絞る作業

各班がまとめの作業に入るが、具体的な手順についてはうまくまとまらず、一人一人の作業をまとめていくのに班長は苦勞していた。そして、約5時間という制約の中で、結局のところ「ODA白書」に沿った形での編集が中心となった。

13時間目

各班、発表用の資料の清書

各班員がまとめた内容を清書し、1枚の大きな展示用の紙につなぐ作業をする。

14時間目

クラス保護者会で発表

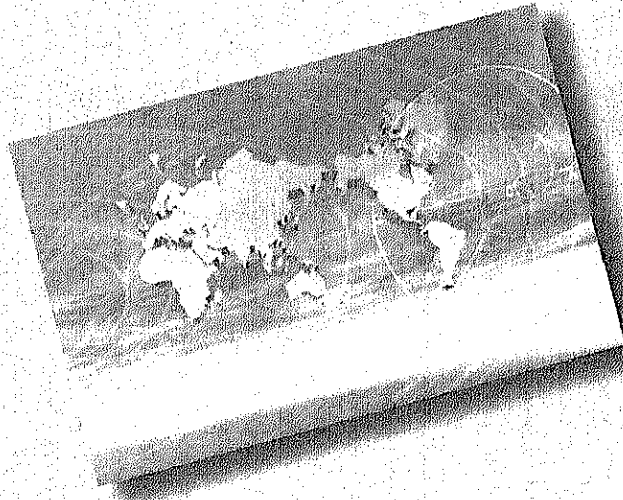
クラス保護者会場で掲示し、その内容を各班が発表する。生徒のみならず、保護者の方たちも、JICAを中心とする国際協力の現状について共に学ぶ機会が与えられた。

15時間目

感想記入とそれに対するコメント

クラスでの初めての国際事情研究プロジェクトとなったが、その感想を記入してもらい、それに対する私のコメントを伝える。

參考資料

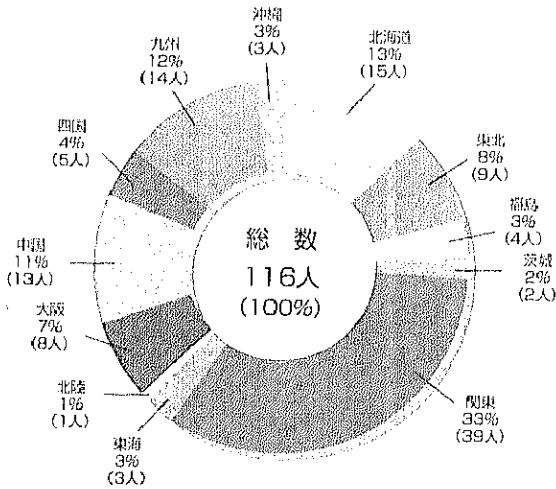




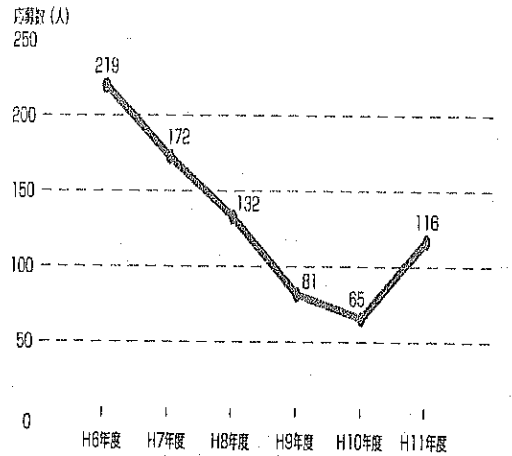
募集情報

●地域別応募状況

- 募集期間：1月8日～4月20日
- 応募総数：116名



●高校教師海外研修応募状況の推移 (平成6年度より)



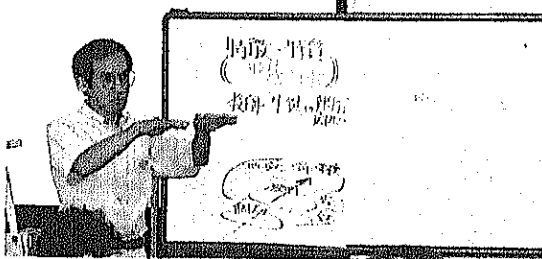
事前研修

(1)国内機関研修

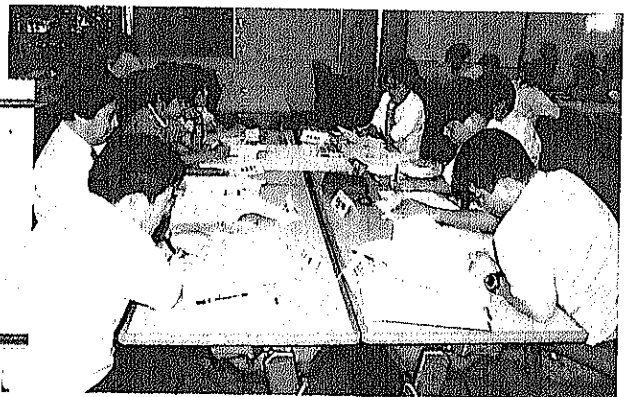
- ・実施時期：平成11年6月～7月
- ・実施場所：国際協力事業団各国内機関
- ・研修内容：①開発途上国の現状と課題
②ODAとJICA事業について

(2)事前研修

- ・実施時期：平成11年7月26日～27日
- ・実施場所：東京国際研修センター (TIC)



グループ別ディスカッションの発表をする
児玉教諭



グループ別ディスカッションで開発教育の課題を議論する参加者たち

7月26日(月)

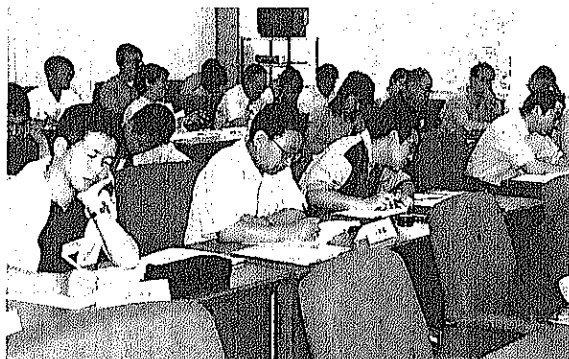
第1日目

13:00~	受付開始
14:00~14:50	開会挨拶 JICA総務部広報課長 末森 満 参加者自己紹介 研修日程説明
14:50~15:00	ブレイク
15:00~15:50	各国概要説明、訪問国情報 ザンビア班 JICA東京国際研修センター研修第一課長代理 小淵 信司 バングラデシュ班 JICA社会開発調査部社会開発調査第二課 福田 義夫 ポリビア班 JICA地域部準備室中米・カリブグループ 関口 美紀
15:50~16:00	ブレイク
16:00~18:00	グループ別ディスカッション 6つのグループに分かれ、グループごとに1つのテーマを決め、実践プランをたてる。 (1グループ) 開発教育をすすめる上での教材や情報について (2グループ) 学校教育における開発教育 (3グループ) 参加型のワークショップやスタディツアーについて (4グループ) 周囲の理解と生徒の関心を引き出すには (5グループ) 開発教育の現状と課題

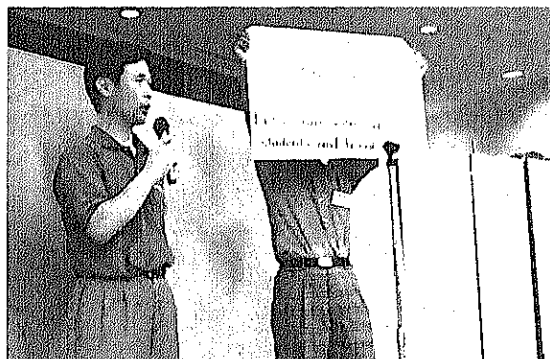
7月27日(火)

第2日目

9:30~9:40	諸連絡
9:40~10:50	グループ別発表(グループ別ディスカッションでの実践プランを発表)
10:50~11:00	ブレイク
11:00~12:00	コース別ディスカッション 各班で研修中の役割分担を決めたり、グループにおける目標をたてる。
12:00~13:00	昼食
13:00~13:50	渡航手続き等説明
13:50~14:00	ブレイク
14:00~17:00	開発教育ワークショップ グローバル教育・西東京センター 桜井 高志氏 (詳しくはp.50をご覧ください)
17:00~18:00	ブレイク
18:00~19:30	結団式(コース別ディスカッションでの検討結果を発表)



桜井高志氏の講義を熱心に聞き入る参加者たち



結団式では、コース別に研修出発にあたっての抱負を述べる



昨年に引き続き、JICA高校教師海外研修の事前研修として開発教育ワークショップを担当させていただきました。ここでは、事前研修の概要を紹介するとともに、学校での実施の際の参考となるように、当日使用した教材の一部の詳細をご紹介します。

【事前研修の概要】

日 時：7月27日(火) 14:00~17:00

時 間：3時間

対象者：約30名（参加者：高校教師、全科目）

ねらい：①学校で使える開発教育の手法を紹介する

②海外研修での経験を開発教育の教材に利用するためのヒントを得る

③参加者自身が開発教育の意義と役割を再認識する

【プログラムの流れ】

I. 導入

- (1) 講師自己紹介、グローバル教育と開発教育
- (2) 「開発教育とは？」
- (3) 「部屋の4隅」：「開発教育…って？」

II. なぜ、開発教育が必要なのか？

- (1) 手法の紹介、「参加型学習」とは
- (2) ブレーンストーミング：「開発？」
- (3) 『世界からきているモノを探せ！』
- (4) 『“W”の悲劇』

III. 実習：「ラオス」を題材にした教材からの検討

- (1) グループ分け：『地図パズル』
- (2) フォトランゲージ：『物語を作ろう！』
- (3) シミュレーション：『ラオス農村の開発』
- (4) 振り返り

3時間のプログラムの流れは表の通りである。

参加者の中には、既に開発教育をなんらかの形で授業の中などに導入している人から、今回初めて「開発教育」という言葉を聞いたという人まで幅広い層の教師がいた。まずは参加者間の相互理解と共通認識をはかるため、I 導入では「開発教育」の基本的な考え方の確認とアイス・ブレーキングを兼ねた参加者分析『部屋の4隅』を行った。

次に、II では、開発教育の特徴の一つである「参

加型学習」の意義を確認するとともに、その実例の一つとして『世界からきているモノを探せ！』というアクティビティを行った。このアクティビティでは、私たちの身の周りにあるさまざまなモノの多くが海外、特に「開発途上国」(以下、途上国)で製造されていること、さらにその原料を考えれば、私たちの生活に必要なモノのほとんどが外国から輸入されていることを確認した。

この作業の目的は、生徒たちにとってしばしば遠い国の難しいテーマである「開発問題」を提示する前に、自分たちと世界とのつながりに気付かせることである。開発教育の目標の一つは、社会の中での自分の世界に対する主体的な役割を考えることにある。その意味で、開発教育の導入として、自分と世界とのつながりを認識することが不可欠なのである。

次の『“W”の悲劇』は、自分のパースペクティブ、つまり「ものの見方」に気付くアクティビティである。詳細は省略するが、途上国の問題を扱う際に、私たち日本人の一面的な角度からの視点を避け、多角的・複眼的な見方の必要性を感じ取ることを目的としている。

さて、基本的な開発教育の考え方や開発教育に取り組む際の留意点を確認をした上で、III 実習で「ラオス」をテーマとした教材を使った一連のプログラムを体験していただいた。実際の授業では3~5時間程度をかけて実施するプログラムであるため、研修では省略した部分もあるが、ここではその全容を紹介する。

実習：「ラオス」を題材にした教材からの検討

- (1) グループ分け：『地図パズル』
- (2) フォトランゲージ：『物語を作ろう！』
- (3) シミュレーション：『ラオス農村の開発』
- (4) 振り返り

この「ラオス」をテーマとしたアクティビティは、大きく3部から構成されている。まずは、(1)『地図パズル』によって、作業のためのグループ作りをするとともに、ラオスという国の概要を確認する。次に、(2)

フォトランゲージ『物語を作ろう!』では、ラオスの農村と都市の日常風景の写真から想像力を働かせてラオスの人々の生活や社会状況を考える。そして、(3)シミュレーション『ラオス農村の開発』では、ある農村地域の開発問題をテーマとして、立場の異なるアクターがどのように地域の開発について考え、互いの利害の違いに気付いた上で、どのように合意を形成するかというシミュレーションを行う。また、交渉のプロセスでは相互の考え方の相違だけでなくしばしば感情的な対立を生み出すことを、ロールプレイ的に体験することによって、合意形成のプロセスにおける相互理解の重要性と自己主張とともに相手の立場を考えた建設的な意見交換の必要性を考えることが目的である。

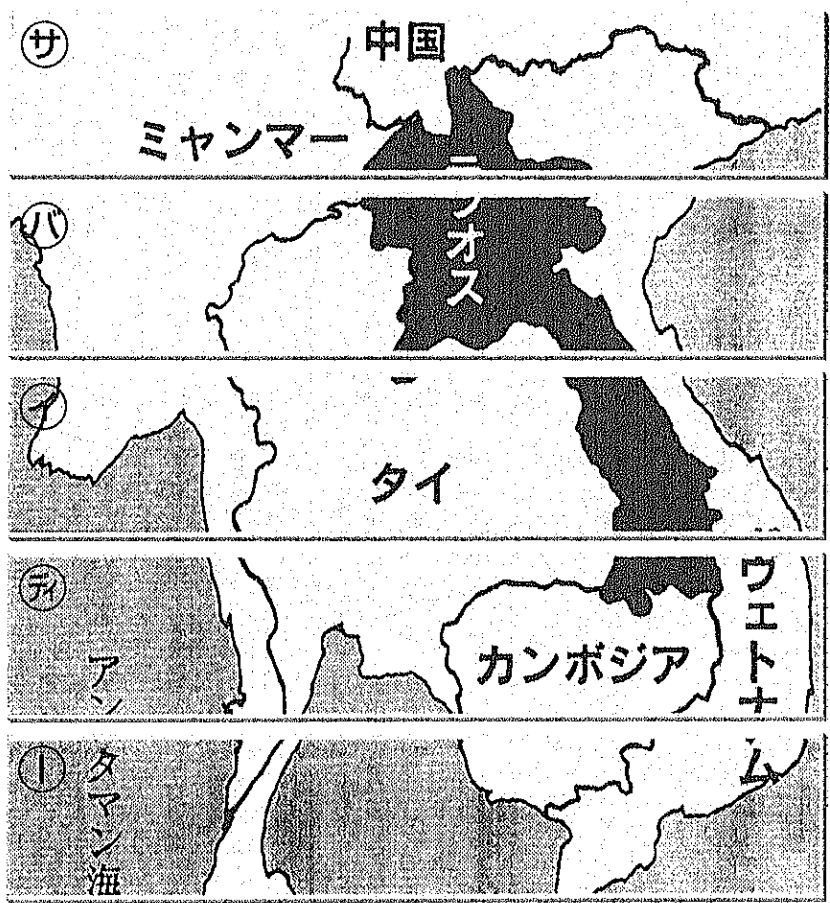
多少、複雑な印象を与えるかも知れないが、順を追って組み立てると流れの良いプログラムであるので、これを一つの参考として各自の海外研修の事例を組み入れることによって応用・発展させていただきたい。

(1) グループ分け：『地図パズル』

おすすめ方：

- ① ラオスの地図を5等分したカード(下図)を各人にランダムに一枚ずつ配る。各人は配られたカードの裏に書かれたラオスの事情をよく読んで理解する。
- ② 次に、カードの表を見て、5枚一組でラオスの地図が完成するように仲間探しをする。5人グループができれば、着席する。
- ③ 出来上がったラオスの地図をグループで見ながら、ラオスの地理的・地勢的な特徴を確認する。
- ④ 最後に、各自のカードの裏側の情報を一人ひとり順番に読み上げ、ラオスの概要についてグループで確認する。

【カードの表面】



【カードの裏面】

<ラオスの概要>

ラオスの国土の面積は日本の本州の面積とほぼ同じ位で、国土の大半はメコン川の東に広がる傾斜地でその約40%が森と山岳地帯です。人口は約450万人で都市に住む人は約10~15%といわれています。その他はほとんどが農業を営み、自給自足に近い生活をしています。また国民の多くは低地ラオ族ですが、山岳地帯には70もの少数民族が独自の文化・言語で生活しています。

ラオスは14世紀のランサーン王国建国以来、周辺のクメール帝国、アユタヤ王朝、シャム（タイ）などの大国に影響を受けてきましたが、19世紀末にはフランスの植民地下に置かれることになりました。

<ラオスの近代史>

仏統治は第2次大戦まで続きましたが、その間、仏は植民地経営にはベトナム人官吏を登用し、また「愚民政策」(教育を受けさせない)をとり、ラオスに西洋式教育制度を導入しませんでした。1954年のジュネーブ協定によって事実上仏のインドシナ支配は終わりましたが、同時に独立派左派と米の支援を受けた王国との間で内戦が始まりました。また、ベトナム戦争での米の北爆は、一説にはベトナムよりもラオスに多くの被害をもたらし、国民の11%が死亡し70万人が難民化したといわれています。

1975年にサイゴンが陥落し、同時にラオスでも無血革命によって社会主義政権が樹立しました。この時、高等教育を受けた人や経済的に余裕のある人の多くが西側諸国に難民として流出しました。

<ラオスの経済>

旧ソ連の経済状況が傾き援助が期待できなくなると、1986年には経済解放政策を打ち出しました。しかし、国家の開発・発展にかかる資金や技術は西側の経済大国に依存しています。輸出品のほとんどは木材と電力で、現在も50以上のダム建設計画がありますが、環境や村落への影響が心配されます。また建設資金も借款による部分が多くラオスの利益となくは疑問が残ります。

国民一人当りのGNPは250ドルと世界の最貧国の一つですが、森とともに生活する村では現金はほとんどいない生活をしています。一方、都市部では外国製品や印刷物、また電波によるタイからの情報が流入し、人々の生活様式も急速に変わってきています。

<ラオスの農村>

ラオスの農村の生活は森なしには考えられません。主食のもち米のほか、おかずは森でとれる様々な野草や小動物や魚です。森の木で家具や食器や漁具、また家も自分たちで作ります。料理をするときには薪を森からとってきます。また、森の様々な植物は病気のときの薬草となり、豊かな森があれば病院もいりません。水道はありませんが川や井戸の水はとてもきれいです。電気のない生活も電気を使う必要がないので不便はありません。しかし、最近では町に出稼ぎに出て現金収入を得、自家発電でテレビを見る家もまれに見受けられます。

<ラオスの都市>

ラオスの都市部では、外国企業の進出や開放政策の影響でたくさんの電気製品やプラスチック製品、化繊の服など多くの外国製品が流入してきています。同時に車が増加したり、処理されないゴミの増加も問題になってきています。タイからのテレビ・ラジオの電波は国境を越えて入ってくるので、商業ベースの番組や娯楽番組を大人も子供もみています。ラオス語はタイ語と非常に似ているので、より簡単なタイ語は子供にもよくわかりラオス語と区別のつかなくなる現象も出始めています。

(2) フォトランゲージ：『物語を作ろう！』

おすすめ方：

- ①ラオスの都市部の写真4～5枚、農村部の写真4～5枚（その他に、子どもをテーマとした写真、伐採された木材やその運搬・製材などの写真、ダム湖や発電所の写真なども可能）などを各グループに配付する。
- ②写真を見てわかること、気付いたことなどをグループで話し合い、ワークシート(1) (P.54参照)

に記入させる。質問があれば、グループに行って教師が答える。

- ③その4～5枚の写真を使って、ラオスの人々の生活の様子や社会状況などを説明する物語を考える。
- ④グループ毎に、紙芝居形式でラオスの状況について全体で発表する。他のグループは質問をして不明な点を確認する。この時、事実と大きく異なる点があれば、教師が訂正し解説する。

【写真の例：農村の生活】



【写真の例：都市の生活】



【写真の例：子どもの様子】



(3) シミュレーション：『ラオス農村の開発』

おすすめ方：

- ① 5人のグループを5つ以上つくる。(5つ以上とは、P.55のA～Eの役割を各グループに割り振るため。A～Eのグループは複数でも構わない。人数が半端な場合はグループの人数を6名にする。)
- ② 5つ(以上)のグループそれぞれに、A～Eの内の一つの役割だけを記した【この村の状況】シートを配付する。この時、各グループにはA～Eの立場が違うことは伝えない。
- ③ グループ作業の課題を伝える：課題「自分たちのグループの立場に立って、望ましい地域開発のあり方を考えてプロジェクトを立案すること」
- ④ 【この村の状況】を指導者が読み上げる。この時、A～Eの立場の部分は読み上げない。状況の把握に集中させるため、マーカーなどを使って重要な部分にアンダーラインを引かせると良い。
- ⑤ ワークシート(2)(下図参照)を配付し、プロジェクトの名称、目的、対象、期間、予算、プロジェクトの流れを必ず考えるように指示する。その際、予算規模などを考える参考となる資料または情報があると良い。特にBの「村の若者」のグループには農村の現金収入を考慮させることがポイント。また、なるべく具体的なプロジェクトの提案を促すが、グループ内の合意形成の必要性を伝える。(※時間を使った徹底した議論が必要だが、期限もあることを考えさせる。但し、しばしば期限というのは「村の人々」にとっては意味がないことにも留意する。)

- ⑥ それぞれのグループのプロジェクト案が出来上がったら、グループの全員がそのプロジェクトについて説明できるようにワークシート(2)に全員に記入させる。そして、グループの一人ひとりがグループの代表として自分たちのプロジェクト案を主張しなければならないことを伝える。
- ⑦ グループのメンバーに1～5の番号をつけさせ、これから番号ごとの交渉の会議に参加することを伝えて、1～5の会議のための新しいグループをつくらせる。その時、各自の立場が明確にわかるように立場を明示した名札シールなど胸に貼ると良い。
- ⑧ 1～5のグループでは、A～Eのそれぞれの立場で自分たちの考えたプロジェクトを説明して主張させる。立場の違いによって利害が異なり、主張するプロジェクトに食い違いが生じる場合が多い。議長役にEの国連開発計画の担当者を指名しても良い。
- ⑨ 議論が白熱し、結論がでない状態であれば、一時中断して自分のグループ(A～E)に一旦戻る。1～5のグループで何が起こったかを共有させる。次の交渉の作戦を考えさせても良い。
- ⑩ 上記の⑧～⑨のプロセスを数回くり返してもよい。現実の交渉の場合にも、長期間にわたる根気のいる調整が必要なことに気付かせる。
- ⑪ 最後に、このアクティビティを振り返り、ここから学んだことを話し合う。途上国の問題だけでなく、日本の私たちの周辺にある開発と環境の問題などへと発展させると良い。

【ワークシート(1)】

タイトル	(1)わかること/想像できること	(2)興味ごと/思うこと/疑問点
写真 どんな写真? 1		
写真 どんな写真? 2		
写真 どんな写真? 3		
写真 どんな写真? 4		

【ワークシート(2)】

『ラオス農村の開発プロジェクト』

(1) P.55のタイトル: F	J
(2) 目的	
(3) 対象	
(4) 役割	
(5) 手順	
(6) P.55の表1	

【この村の状況】

この村は、首都ビエンチャンから北西へ約60 kmの山中にある人口400人程の小さな農村である。昔からモチ米と野菜、川の魚、小動物を食事の中心にして、ほとんど自給自足の生活を営んでいる。村の近くの森からは小動物が獲れるだけでなく、建物の材料となる木材や燃料となる薪、数十種類もの薬草なども採れる。現金収入は村の女性たちがつくる織物とタバコの栽培くらいで、一家族の年間の収入は約400ドルであるが、伝統的な生活をしていく分にはお金はほとんど必要としない。

しかし最近、近郊に進出している外国企業や首都ビエンチャンへ出稼ぎに出る村の男たちもいて、村の幾つかの家には自家発電機で見るテレビがあり、大人も子どもも自国の情報だけでなく隣国のタイの様子や世界のニュースなどに触れる機会も多くなっている。村人の中には家族全員でビエンチャンの近くに引っ越しを予定しているものや村の近くに働きに出たいと考えているものもいる。

一方、伝統的に行ってきた直蒔きの米作は雨

期の洪水で安定した収穫の保障はない。また、“灌漑(かんがい)”などの新しい農業知識や技術をもった人材はここにはいない。だいたいこの村の子どもで高校まで進学するのはまだ10人に3人程度で、彼等も進学で街に出ると田舎の生活にはなかなか戻ってこない。村にある小学校にはほぼ100%の子どもが卒業するようになったものの、徒歩1時間の隣村の中学校への進学率は40%に満たない。

保健医療の面では、近代的な病院もビエンチャンにはできたが、高い医療費の心配や西洋医学に対する不信も根強い。悪いことに村から1時間ほどの幹線道路沿いに来た商店では、昔はあまりなかった甘いお菓子やジュースが売られ、歯磨の習慣のなかった子どもの歯は虫歯に侵される。また、ゴミを焼却する習慣がないので、お菓子のはいついたビニール袋は村のあちらこちらに散乱している。

村人の中でも、伝統的な暮らしを守りたいと思っている人もいれば、近代的な生活に憧れている人もいる。

課題

「開発と援助」シミュレーション

あなたは、

(A) ラオス政府の地域開発	のプロジェクト担当者です。
(B) この村の若者で村の将来を考える	
(C) 日本企業（商社）	
(D) 日本のNGO（非政府組織）	
(E) UNDP（国連開発計画）	

←* (A)～(E)の内の一つだけを記入

ラオスは、1989年より経済開放政策をとって経済発展の道を模索していますが、一方、メコン河の開発については地域住民の生活への影響や環境問題も深刻化しています。

このような状況の下で、あなたはラオスのこの小さな山村を含む地域の開発を担当することになりました。

最も良いと思われるプロジェクトを提案してください。

コース別日程／参加者氏名

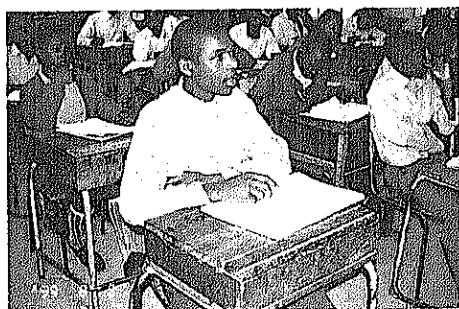
ザンビア Zambia

日付(曜日)	午前	午後
7/28(水)		18:00 成田発 21:30 香港着
7/29(木)		23:50 香港発
7/30(金)	ヨハネスブルク着 ヨハネスブルク発→ルサカ着	パモジホテルチェックイン JICAザンビア事務所訪問、フリーフィンク
7/31(土)	ルサカ市内見学	アグリカルチャーショー見学
8/1(日)	ルサカ発	リビングストーン着
8/2(月)	青年海外協力隊活動現場視察 (リビングストーン博物館 曹江隊員) (保健省自動車整備 岩橋隊員)	名所旧跡視察
8/3(火)	チョマに向け移動 青年海外協力隊活動現場視察(チョマセカンダ リースクール 新関隊員)	ザンビア人教師及び青年海外協力隊員との昼食、 意見交換 ルサカに向け移動
8/4(水)	日本大使館表敬 教育省表敬	JICAプロジェクト視察 A班:ルサカ市PHC(プライマリー・ヘルス・ ケアプロジェクト) B班:ザンビア大学病院感染症対策
8/5(木)	青年海外協力隊活動現場視察 A班:エプリフォンカレッジ B班:国立科学技術研究所等	青年海外協力隊活動現場視察 (カビニ村 関谷、柿沼隊員)
8/6(金)	ルサカ市内セカンダリースクール視察	ルサカ市内セカンダリースクール視察 専門家活動現場視察 (職業訓練センター 廻谷専門家) JICAザンビア事務所訪問、意見交換 青年海外協力隊、専門家との懇親会
8/7(土)	終日自由行動	
8/8(日)	14:05 ルサカ発	16:05 ヨハネスブルク着 17:20 ヨハネスブルク発
8/9(月)		12:10 香港着 14:55 香港発 20:00 成田着

氏名	担当教科/所属学校	氏名	担当教科/所属学校
児玉 秀樹 こだま ひでき	英語 北海道札幌藻岩高校	隅谷 義正 すみや よしまさ	英語 群馬県立太田女子高校
渡辺 英輝 わたなべ ひでき	英語 北海道清水高校	井澤 俊夫 いざわ としお	英語 大宮市立大宮西高校
村上 育朗 むらかみ いくろう	地歴・公民 岩手県立黒沢尻南高校	宇治川 秀 うじがわ すぐる	地歴 東京都立大泉北高校
佐藤 章穂 さとう のりお	政経 宮城県古川高校	小島 義晴 こじま よしはる	国語 東京都立調布北高校
庄司 一幸 しょうじ かずゆき	地歴・公民 福島県立石川高校	山本ちひろ やまもと ちひろ	英語 私立桐朋女子中学・高校
高梨 隆 たかなしたかし	地歴・公民 私立巖ヶ浦高校	小尾 和正 おひ かずまさ	地歴・公民 組合立甲陵高校
中川 哲夫 なかがわ てつお	英語 栃木県立宇都宮北高校	和泉 順子 いずみ じゅんこ	英語 静岡県立長泉高校

*同行者: 尾口 忠弘 JICA二本松青年海外協力隊訓練所
柳橋 元 JICA人材確保支援部準備室派遣業務グループ(現派遣支援部派遣業務課)

JICAザンビア事務所前



チョマセカンダリースクールでの数学の授業風景
(撮影：村上教諭)



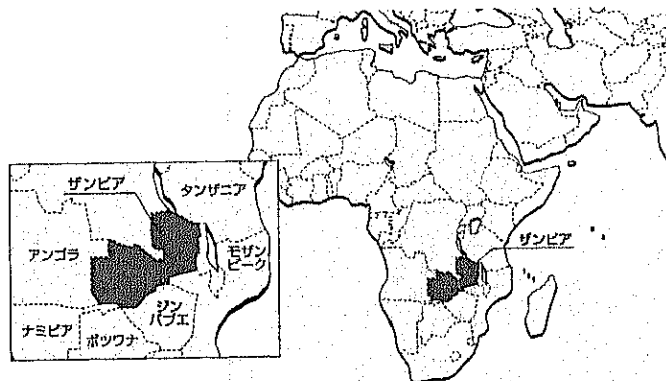
カビニ村の青年海外協力隊活動現場を視察 (撮影：山本教諭)



JICAザンビア事務所での説明を受ける参加者たち
(撮影：中川教諭)



チョマセカンダリースクールで協力隊活動現場の視察
(撮影：中川教諭)





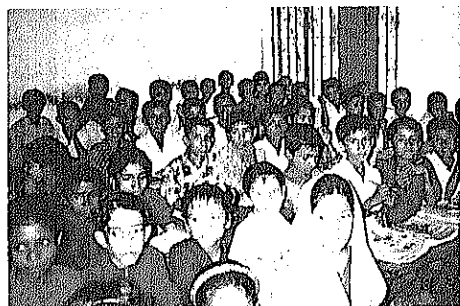
Bangladesh Bangladesh

日付 (曜日)	先 行	後
7/28 (水)	11:00 成田発	15:30成田着
7/29 (木)	11:25 バンコク発 12:50 ダッカ着	ホテルチェックイン 日本大使館表敬訪問
7/30 (金)	川河視察 学校サリ一縫製工場、田舎の家屋視察	
7/31 (土)	市内見学 (国会議事堂、モスク等)	JICA/ Bangladesh事務所訪問
8/1 (日)	ダッカシシュ病院 (青年海外協力隊活動現場) ダッカ発	ダウトガンディ着 モデル農村開発 (無償資金協力)、青年海外協力隊活動現場視察
8/2 (月)	コミラバード (Bangladesh農村アカデミー) 周辺視察	
8/3 (火)	コミラ市教育事務所による講義	ダッカへと移動
8/4 (水)	ダッカカレッジ、ラルメイジャガールズカレッジ視察	日本人学校訪問
8/5 (木)	オイスカ農村婦人研修所活動視察 (NGO活動、無償資金協力現場)	Bangladesh家禽研究所 (プロジェクト方式技術協力) 視察
8/6 (金)		14:00 ダッカ発 13:50 バンコク着
8/7 (土)	10:50 バンコク発	19:00 成田着

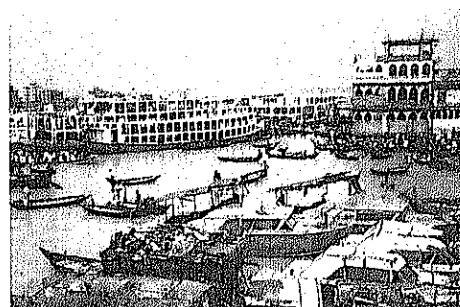
氏 名	担当教科/所属学校	氏 名	担当教科/所属学校
橋爪 真理 はしづめまり	英語 三重県立四日市工業高校	尾崎 幸仁 おさき ゆきひと	農業 大阪府立食品産業高校
定立こずえ あだち こずえ	英語 私立中京商業高校	有本 秀夫 ありもと ひでお	英語 和歌山県立南紀高校
村田 哲夫 むらた てつお	理科 石川県立飯田高校	北川 雅世 きたがわ まさよ	家庭科 奈良県立奈良高校
内田 千秋 うちだ ちあき	数学 大阪府立北淀高校	中島 恭子 なかしま きょうこ	社会 滋賀大学教育学部付属養護学校 高等部

*同行者：白井 宏明 JICA大阪国際センター
石津江 勝彦 JICA大阪国際センター

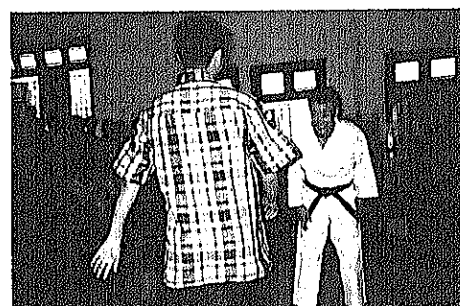
ダッカ市内コミラパート研修施設にて



コミラ村近郊の小学校の様子
(撮影：内田教諭)



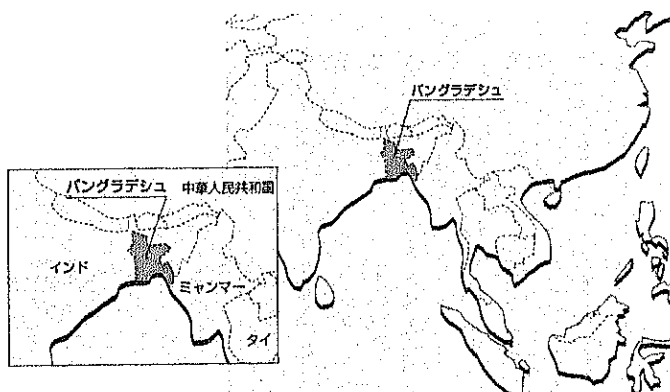
オールドダッカの港の様子
(撮影：中島教諭)



ダッカカレッジにて空手道の演武
(撮影：内田教諭)



オイスカの農業研修所で農業技術の研修を受ける女性たち (撮影：内田教諭)





コース別日程／参加者氏名

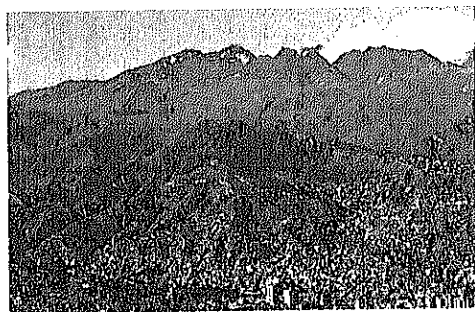
ボリビア Bolivia

月日(曜日)	午 前	午 後
7/28 (水)		17:30 成田発
7/29 (木)	06:01 ラパス着	JICAラパス事務所訪問
7/30 (金)	青年海外協力隊活動現場視察 ラパス市立図書館(司書 塚本隊員) 青年海外協力隊活動現場視察 ラパス陸上競技協会(陸上競技 山田隊員)	青年海外協力隊活動現場視察 プエルト・デ・ メヒジョネス職業訓練校(柴養士 小野隊員) 青年海外協力隊活動現場視察 メルカード・カ マチョ保育所(保育士 武藤隊員)
7/31 (土)	テイワナク遺跡視察	
8/1 (日)	水産センター視察	
8/2 (月)	ラパス市ベネズエラ高校訪問 (教師や生徒との意見交換会)	無償資金協力実施予定サイト訪問 ラパス市コパカバーナ小学校、フアンエルシェ ル小学校、ルクセンブルゴ小学校 技術協力専門家活動現場訪問 (地方水道計画 下平専門家) (農業開発計画 西野専門家)
8/3 (火)	自由行動	サンタクルスへ移動 PAN(幼児教育プログラム)視察 JICAサンタクルス支所訪問
8/4 (水)	青年海外協力隊活動現場視察 フリア・ヒメネ ス・デ・グティエレス聴覚障害児施設 (言語療法士 森重隊員) 青年海外協力隊活動現場視察 ガブリエル・レ ネ・モレノ大学(看護 川那辺隊員)	オキナワ移住地(オキナワ日ボ協会表敬訪問) 第一日ボ校視察
8/5 (木)	農業総合試験場	日本病院視察
8/6 (金)	9:12 サンタクルス発	15:53 マイアミ着
8/7 (土)	7:45 マイアミ発	
8/8 (日)		15:00 成田着

氏 名	担当教科/所属学校	氏 名	担当教科/所属学校
川本 収 かむちとおさむ	数学・商業 私立鳥取女子高校	山本 裕子 やまもと ゆうこ	国語 福岡県立門司高校
小泉 敬子 こいずみけいこ	看護 私立ベル学園高校	阿部 英樹 あべひでき	英語 私立九州学院高校
藤原 淑都 ふじわら よしと	工業 広島県立呉工業高校	水口 和博 みずくちかずひろ	地歴 宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校
煙草 里恵 たばこりえ	国語 私立野田学園高校	末永 高志 すえながたかし	農業 鹿児島県立市来農芸高校
高崎 雅人 たかさき まさと	英語 高松市立高松第一高校	濱里 登 はまさと のぼる	農業 沖縄県立南部農林高校
杉村 真一すぎむら しんいち	社会 私立高知中央高校		

*同行者：有田 敏行 JICA沖縄国際センター

サンタクルス農業総合試験場の
広大なアブラナ畑の前で
(撮影：川本教諭)



高地に広がるラパスの街
(撮影：山本教諭)



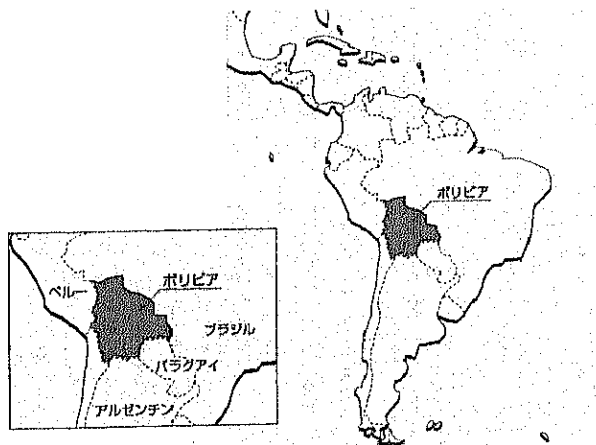
誇りをもって国歌を歌う子どもたち（ラパス・コパカバーナ小学校で）
(撮影：川本教諭)



サンタクルス市北東にある日本人移住地コロニア・オキナワにて（撮影：藤原教諭）



ルクセンブルゴ小学校の元気な子どもたち。ここは15
クラスで生徒数503人、教師27人という規模の国立小
学校。（撮影：山本教諭）



訪問国概要

ザンビア共和国 (Republic of Zambia)

面積	75.3万km ² (日本の約2倍)
人口	944万人 (97年：世銀)、人口増加率2.8% (90～97年：世銀)
首都	ルサカ (人口132.7万人) (1995年推定) 海拔1,227m
人種	73部族 (トンガ系、ニャンジャ系、ベンバ系、ルンダ系)
言語	英語 (公用語)、ベンバ語、ニャンジャ語、トンガ語
宗教	多くはキリスト教、その他伝統宗教
GNP (実質)	3,536百万ドル (97年：世銀)
一人当たりGNP	370ドル (97年：世銀)
失業率	不明 雇用は就労人口の30%をカバーしているにすぎないと言われている。(IMF資料)
通貨	クワチャ
為替レート	1ドル=2,485ZK (99年12月)
経済関係	(1) 日本の対ザンビア貿易 (1998年：H.11通商白書より) (イ) 貿易額 輸出 42.71億円 輸入 151.70億円 (ロ) 主要品目 輸出 自動車・貨物自動車・バイク等 (71.9%)、無線用通信機器 (4.6%) 輸入 銅地金 (58.1%)、コバルト (37.9%)、ニッケル (3.9%)、たばこ (0.5%) (2) 日本からの直接投資 18件 377.7億円 (1997年度までの累計)

主要経済指標等

	90年	95年	96年	97年	
人口 (千人)	8,122	8,978	9,215	9,443	
名目GNP	総額 (百万ドル)	3,391	3,605	3,363	3,536
	一人当たり (ドル)	420	400	360	370
経常収支 (百万ドル)	-594	—	—	—	
財政収支 (十億クワチャ)	-9.8	-203.2	29.3	—	
消費者物価指数 (90年=100)	100.0	2,674.1	3,324.3	4,171.8	
D S R* (%)	15.1	186.0	22.3	19.9	
対外債務残高 (百万ドル)	7,265	6,859	7,182	6,758	
為替レート (年平均、1USドル=クワチャ)	30.29	857.23	1,203.71	1,333.81	
分類 (DAC/国連)	後発開発途上国/LDC				

*DSR…デッド・サービス・レシオ (債務返済比率：外貨収入に対する公的債務支払い額)

主要社会開発指標

	90年	最新年		90年	最新年
出生時の平均余命 (年)	54	43 (97年)	乳児死亡率 (1000人当たり人数)	76	113 (97年)
成人非識字率 (%)	27	22 (95年)	5歳未満児死亡率 (1000人当たり人数)	122	189 (97年)
初等教育純就学率 (%)	80	75 (96年)	安全な水を享受する人口割合 (%)	60 (88～90年平均)	53 (96年)